氏　　名	川島　秀一
学位（専攻分野）	博士（文学）
学 位 記 番 号	総研大乙第 195 号
学位授与の日付	平成２２年３月２４日
学位授与の要件	学位規則第６条第２項該当
学 位 論 文 題 目	追込み漁の民俗学的研究―日本列島における漁法の特質と系譜―
論 文 審 査 委 員	主　査　　教授　常光　徹 准教授　西谷　大 准教授　笹原　亮二 教授　徳丸　亜木(筑波大学) 教授　池田　哲夫(新潟大学)

論文内容の要旨

本論文は、日本列島における「追込み漁」の実態を明らかにし、その漁法の特質と系譜、及び、追込み漁をめぐる漁撈伝承と民俗社会との関わりの一端を究明することを目的としている。

序章では、追込み漁と呼ばれる漁法の基本的な特徴を、漁場、漁期、漁撈組織の面から指摘し、本論を展開していくうえでの視点の提示と、研究史を整理して、これまでの成果と問題点を検討している。従来は、各地の追込み漁に注目した個別の調査・研究が中心であったが、本論文では、それを日本列島という広がりのなかで捉え、漁法の特質と相互の影響関係、その系譜を明らかにすることの必要性を主張している。

第一部「追込み漁の二つの系譜」では、伊豆諸島や伊豆半島の追込み漁を対象として分析し、その漁法には、「カズラ網型追込み漁」と「沖縄型追込み漁」の二つの系譜があることを指摘し、両者の影響関係について論じている。第一章「新島の大掛網」では、新島村若郷の大掛網を取り上げる。もともと沖から磯へとイサキを追い込んでいたカズラ網系統の漁法に、沖縄から伝わったアギャー（廻高網）の漁法が加わって成立したものであることを明らかにし、今日までの変遷について述べている。第二章「伊豆のイサキ網」では、沖縄型追込み漁を受け入れて成立した静岡県初島の「バッカイ網」を中心に、漁法が定着するための要因を指摘するとともに、若郷の大掛網を相対化している。第三章「伊豆諸島とタカベ」では、タカベを捕る東京都式根島の「カッチャクリ」と神津島の「キンチャ」に注目し、これらの漁法も「沖縄型追込み漁」の影響がつよいことを明らかにしている。

第二部「海面を追う漁法」では、カズラという木を縒って作った縄に鳥の羽根を等間隔に結びつけたものを用いてアユなどを追い込む「鵜縄」と、鳥の羽根ではなく木片を吊り下げた縄でタイなどを追い込む「カズラ網(縄)」、竹竿の先に海鳥の羽根や布切れなどをつけたものを海中にさし入れて魚を追い込む「鵜竿」の漁法に着目している。第一章「西海のイサキ網」では、長崎県対馬、五島列島の福江島、鹿児島県甑島などのイサキ漁を取り上げる。ここでは、沖縄型追込み漁とそれ以前から地元で行なわれてきたカズラ網型追込み漁とが、どのような形で複合しているのか、その複合のあり方を明らかにし、また、伊豆諸島において沖縄型追込み漁を受容してきた状況との共通点を指摘している。第二章「カズラ網―鵜縄の系譜」では、瀬戸内海のタイの地漕ぎ網・シバリ網・ゴチ網をはじめ各地の代表的なカズラ網漁を取り上げて、多様な漁法の特徴と系譜について検討している。さらに、追込み漁の祝祭的な性格とともに、現在広島県の鞆の浦で行なわれている観光タイ網についても言及する。第三章「すくい網―鵜竿の系譜」では、鵜竿の漁法と系譜について、主にコウナゴ漁を見渡しながら論じている。南三陸におけるすくい網漁は、ウトウが海中に潜ってコウナゴの群れを追うという生態を巧みに利用した漁法である。三重県の答志島でもウミウを用いての同様の漁法が行なわれている。これらの事例を通して、人と鳥と魚とのあいだで繰り広げられる漁の現場の実態と、そこにみる漁師の知と技について聞書きをもとに明らかにしている。

第三部「海底から海面へ追う漁法」では、海中に潜った人間が魚を海底から海面へと追い込んで捕獲する「沖縄型追込み漁」が対象である。第一章「沖縄の追込み漁」では、沖縄本島の糸満や久高島を中心に、それらの漁師が伝えた漁法を現在でも操業している伊江島や宮古島、石垣島の追込み漁の実態について述べる。アギャー(廻高網)と呼ばれる沖縄の追込み漁は、明治１７年(1884)に糸満で水中眼鏡が発明されてから生れた漁法である。ここでは、海中に潜る漁師が魚と相互に影響を与え合っている関係を明らかにしている。また、久高島における儀礼と追込み漁の関係についても言及している。第二章「糸満漁師の国内出漁」では、糸満を中心とする漁撈集団がアギャーという漁法を携えて、日本列島の各地で操業を試み、出漁地の漁法に影響を与えた問題を検討している。その出漁地である高知県の沖の島・島根県の隠岐・長崎県五島の小値賀島において、彼らはどのように迎え入れられたのかを検討するとともに、それらの地域が伊豆諸島や対馬のように「沖縄型追込み漁」を定着させなかった理由として、「カズラ網型追込み漁」を操業していなかったことや、アギャーがその出漁先の漁業経営に組み込まれていった事実を指摘している。また、沖縄では祭儀のときに神に捧げる魚は「追込み漁」で得るというムラが多いが、その理由として、追込み漁がそもそも神の与えた「寄り魚」を捕るという性格をもつ漁法であったことを論じている。第三章「トビウオの追込み漁」では、沖縄の漁師たちが伝えたアギャーが、列島各地のトビウオ漁にも影響を与えていることを指摘する。

第四部「追込み漁の原点へ」では、「断切網」と「タタキ網」を対象として、追込み漁の基本的な漁撈行為について論じている。第一章「断切網の系譜」では、湾口から湾奥へ向かって何度も網を下ろして横断しながら魚などを追い込む「断切網」について、列島各地のイルカやマグロの追込み漁をもとに論じている。この漁法の系譜をたどるとともに、本来、「追込み漁」は、シャチやクジラが湾奥へ魚を追い込むように、生物が他の生物を追い込む様子を見た人間が考え出したのではないかと推論している。第二章「タタキ網の系譜」では、石を投げ、竹で水面をたたいて、魚を網に追い込む漁法について、列島各地の事例を検討している。とくに個人で行なうタタキ網の場合は、各人の舟が同じ漁場で競合することが多く、集団で行なう追込み漁と同様の取り決めや、籤で日程や漁場を決める例があることを指摘している。

終章では、以上の論述によって得られた知見と成果をまとめている。追込み漁は、基本的に岸や磯に寄りくる魚をいかに効率よく捕るかということから生れた漁法であり、魚の生態や土地の自然条件を熟知しなければ捕獲は難しい。「寄り魚」を捕る沿岸の漁である。それは、一面では神が与えてくれる寄り魚を待って捕獲するという意味を帯びており、一種のハレの日にも似た祝祭的な時空間を生みだしていることについても明らかにしている。さらに、追込み漁の漁師たちは、潜ることによって魚と人間とが相互に影響を与え合っている様子を鋭く観察している点を解明し、魚の行動に対する漁師の心意についてもふれている。

本研究では、各地の追込み漁を対象に実施した聞書き調査と参与観察のデータをもとに、漁師たちが伝承してきた豊かな知恵と漁撈技術を明らかにし、日本列島における漁法の特質とその影響関係を比較・研究する上での一定の見通しをつけている。漁法の系

譜については、「カズラ網型追込み漁」と「沖縄型追込み漁」の類型があることを指摘し、それぞれの具体的な展開と複合の実態を解明している。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、日本列島の広範な地域で行なわれてきた追込み漁について、民俗学的な手法を用いてそれぞれの土地における多様な実態をとらえ、この漁法の特質や系譜関係を明らかにしたものである。精力的な現地調査を実施し、漁師の体験にもとづく聞き書きを中心に、追い込み漁に関する具体的な知識と技術を詳細に記述するとともに、その背後にある心意に迫ろうとする鋭い問題意識と意欲的な研究姿勢に貫かれた論考で、高く評価できる。

研究目的および研究史を概観した序章と本論文の成果を総括した終章をのぞけば、全体は大きく四部に分かれ計十一章から構成されている。各部ごとの評価すべき要点は以下のとおりである。

第一部「追込み漁の二つの系譜」では、伊豆諸島や伊豆半島の追込み漁を対象にして、漁法の類型や相互の影響関係について検討している。東京都新島の大掛網、式根島のカッチャクリ、静岡県初島のバッカイ網を対象とする精緻な調査から、追込み漁には、本土に古くから伝わる「カズラ網型追込み漁」と「沖縄型追込み漁」の二つの類型があることを見出している。この発見は追込み漁の分類と系譜を考察する際の指針として有効性が高い。大掛網は、もともと沖から磯へとイサキを追込んで捕獲していたカズラ網型の漁法が、沖縄から伝わったアギャー（廻高網）と呼ばれるいわゆる沖縄型追込み漁の影響をうけて成立したものであることを明らかにし、今日までの変遷を辿っている。

第二部「海面を追う漁法」では、海面に平行して魚を追込む伝統的な漁法である「鵜縄」「カズラ網」「鵜竿」の漁法に注目して考察している。長崎県対馬、五島列島に伝えられた、沖縄型追込み漁とそれ以前から地元で行われていたカズラ網型追込み漁とが、どのような形で複合しているのか、その複合のあり方を解明するとともに、第一部で取り上げた伊豆諸島の追い込み漁との比較を試みている。また、海鳥のウトウが海中にもぐってコウナゴの群を追うという習性を巧みに利用した南三陸のすくい網漁を取り上げて、人と鳥と魚のあいだで繰り広げられる漁の現場を生き生きと描き、そこに展開する漁師の豊かな知と技を伝えている。

第三部「海底から海面へ追う漁法」では、人間が水中深くから海面へと魚を追込んで捕獲する「沖縄型追込み漁」を対象にしている。沖縄県における実態を記述するとともに、糸満を中心とする漁撈集団が列島の各地に出て操業を行ってきた事実に着目し、彼らが出漁地に与えた影響を多角的な視座から検討し、それぞれの漁法の特質と系譜関係を考察している。また、追込み漁の漁師たちは自分たちが捕獲する魚をどのようにとらえているのかという問題について、水中に潜って魚を追う漁師たちは、潜ることによって魚と人間とが相互に、直に影響を与え合っている関係を鋭く観察している点を明らかにしている。船上で漁に従事する漁師とは魚に対する認識の違いがうかがえる興味ぶかい指摘といえよう。

第四部「追込み漁の原点へ」では、追込み漁の基本的な漁撈行為について論じている。網を仕掛けたあと、石を投げ竹で水面をたたいて魚を網に追い込むタタキ網について、列

島各地の事例を検討し、漁法の特質を指摘している。なかでも、個人で行なうタタキ網の場合は、各人の舟が同じ漁場で競合することが多く、集団で行なう追込み漁と同様の取り決めや、籤で日程や漁場を決める例があることを確認した点も成果である。

全体を通して、本論文は、民俗学の視点に立って追込み漁の実態を多面的な視座から描くとともに、これまでの個別の調査・分析の枠を超えて日本列島という広がりのなかで、この漁法の特質とその影響関係を明らかにしており、従来の民俗学における研究の水準を大幅に引き上げた労作ということができ、高く評価される。また、聞き書きから得た膨大な資料をもとに「カズラ網型追込み漁」と「沖縄型追込み漁」の類型があることを見出し、その諸相を具体的に検討することによって、追込み漁の系譜について一定の見通しをつけた点も大きな成果といえる。さらに、漁撈の技術的な側面だけでなく、随所に漁師たちの知識と技術を背景にした心意を表現する言葉を丁寧にすくいあげることによって、叙述が豊かになっている面も評価される。

今後、追込み漁についての調査・研究を進めるうえで本論文は常に参照されるべき重要な位置を占める研究と見做されるが、すぐれた成果は追込み漁の研究にかぎらず、関連する他の分野の研究に及ぼす影響も少なくないと考えられる。

しかしながら残された課題がないわけではない。列島各地域で展開してきた追込み漁の全体像を明らかにすることに主要な関心が置かれているため、それぞれの地域における漁撈活動全体のなかでの位置づけについては不明な点もあり十分とはいえない。また、追込み漁の受容に関しては、漁獲物の流通、消費といった側面と深く結びついていると考えられるが、この点についての本格的な論究も今後の課題として残されている。

いくつかの課題は残されてはいるが、本論文は新鮮な視点にもとづく実証的でかつ意欲的な研究として学術的な意義が高く評価でき、今後の研究に寄与しうるものである。審査委員は一致して博士学位授与に値する論文であると判断した。